

# 雑がみ掘り起こしへ!

～紙リサイクルを取り巻く課題解決へ向けて～

第2回 雑誌古紙・雑がみの課題

(公財)古紙再生促進センター  
専務理事

川上正智



## 減少する雑誌古紙、増加する雑がみ

2000年以降、循環型社会形成のための法整備や自治体による行政回収の拡大を背景に「雑誌に含まれない、その他の紙類」が増加し、雑誌古紙の品質問題が顕在化した。これに対応すべく製紙、古紙の両業界からの提起により、当センターは2005年に新たな古紙銘柄として「雑がみ」を設定し、自治体や市民レベルへの分別要請を行ってきた。

結果として各自治体での雑がみ回収は増加、ごみ減量、資源化を通じて持続的な社会作りへ寄与してきたが、グラフィック用紙リ系古紙の減少が加速し、雑誌古紙の雑がみ化が進むと同時に、脱炭素、SDGs、財政逼迫を背景とした行政の可燃ごみ対策が強まる中、「雑誌古紙」の「雑がみ」化は、今後さらにその傾向が強まることが予想される。また統計的に「雑がみ」を単独で捕捉することは叶わない状況にあるのが実情であり、「雑誌」の中に「雑がみ」の多くが含まれているという前提でのトレンド分析をせざるを得ない状況にある。

この約20年足らずで、印刷・情報用紙、新聞用紙などのグラフィック用紙内需は半減しており、雑誌・書籍販売部数も42億冊から14億冊(2022年時)へと約1/3に減少し、いずれもその傾向に歯止めがかかっていない。一方、2000年以降の「雑誌古紙(雑がみを含む)」発生量は約30%の減少に留まっており、この数字から類推されることは、雑誌古紙に占める古紙構成の変化が続いていることである。雑誌古紙に含まれるオフィスからのOA用紙等の雑がみの減少傾向も続いており、残り

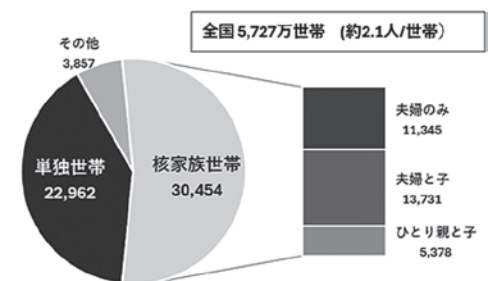
はすなわち、家庭から排出される「雑がみ」混じりの雑誌古紙が増加していることが窺える。

この傾向は今後もさらに強まる傾向にあるが、それに加えて、そもそもの雑誌古紙(雑がみを含む)回収量が、グラフィック用紙由来の雑誌古紙の減少がさらに加速した場合、機密系古紙の減少も加わり、パッケージング用紙<sup>2)</sup>向けを中心とした雑誌古紙消費量を賄いきれない可能性がある。

家庭から排出される古紙の区分は自治体が決定し回収ルートに乗ることが前提であり、また「ごつがみ」の名称も、雑がみ、雑紙、雑古紙、ミックスペーパー、その他紙、等々が存在しており、特に今後は個別案件の可燃ごみ減量対策として、当センター基準以外の古紙が回収対象となるケースも予想される。

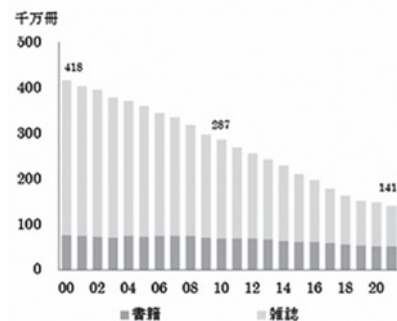
「雑がみ」の課題は、各地区によってリサイクル、分別実態の特性や受け皿の製紙工場事情の違いもあり、全国統一のデフォルト的な対応には課題が多い。また、この問題は人口減少による資源リサイクル行政が過渡期を迎える自治体の存在、脱炭素化、可燃ごみ削減、グラフィック用紙由来古紙の減少、脱プラ化を通

家族類型別一般世帯数(2025年予測)



出所: 国立社会保障・人口問題研究所

書籍・雑誌販売部数推移



出所: 出版科学研究所

じた紙・プラ複合素材包装の増加、紙製容器包装識別マークへの理解バラツキ、製紙原料に適さない禁忌品類の増加等々、古紙品質の低下が懸

念される中で変動要因が多重的に絡み合う課題となっている。

その解を見出すには、丹念に全国各地域ごとの自治体分別・回収状況、可燃ごみ状況、問屋での受入・選別・出荷状況、消費側の製紙工場の特許や制限、あるいは海外環境規制、古紙輸出状況等々をできる限りマトリクス的に整理し問題点が俯瞰できるように、地域毎の方向性を見いだせるかが重要であり、当センターではその整理を進めている。

## 市民の分別意識変化、雑がみへの認識不足

当センターでは地域・世代・性別を考慮した全国の20歳以上男女（千人）を対象に、紙リサイクルに対する意識・行動や古紙の分別・回収等に関する知識や現状認識を採った。一連の結果からは若年世代において、紙リサイクルへの意識・知識が低下している傾向が窺われる。加えて今後の家族構成変化や、共働き世帯・単身世帯・高齢化・外国人増加等は、

これまでのわが国の紙リサイクルを支えてきた分別意識を始めとした根幹を揺るがしかねないことを念頭に置いた分別啓発対策が求められる。そもそも、なぜ一般家庭において、雑がみ回収が思うように進まないのか。多くの自治体の方々が、雑がみ回収に向けてのさまざまな努力、啓発手段（チラシ、SNS、イベント、雑がみ回収袋配布等）を続けられる中、市民の継続的な習慣づけが容易ではないケースも少なくないのでないだろうか。当センターの市民意識アンケートでは「面倒くさい」「目的がよくわからない」「雑がみの種類がわかりにくい」「回収回数が少なく置いておく場所がない」などの意見が目立つ。

意識改革は容易ではない。

一方でESD専門家（環境教育）の間では「子供を変えることで親を変える、社会を変える」との考え方があがるが、日本の紙リサイクルの未来を考えた場合、将来核家族を構成しようが、単身世帯を構成しようが、小さい時の習慣づけ効果は小さく、また現時点でも、子供たちからの発信により、同居する親世代の意識が変わる可能性も否定できないと考える。現在当センターでは、専門家の助言を得ながら、小学生を通じた核家族に於ける、雑がみ分別・回収啓発活動に向けた「社会実験」を検討中であり、その効果、意識変化についても実施後のフォローを通じて探り、更に改善を加えて拡大していく心積もりである。

W 次号では、「雑誌古紙・雑がみの課題②」について状況をまとめる。

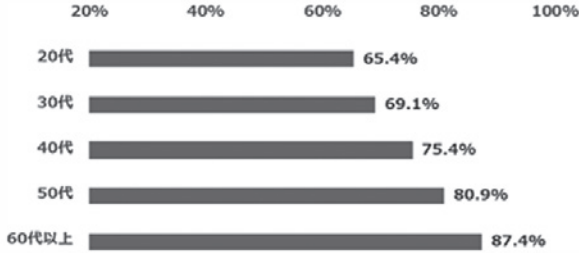


製紙原料に適さない紙類

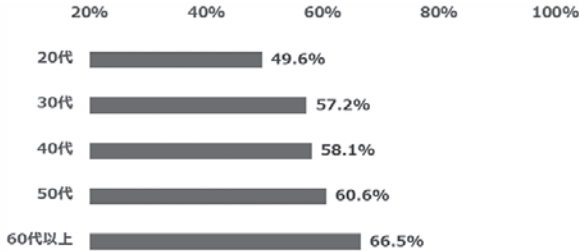


雑がみとは

古紙を分別している



「雑がみ」を知っている



古紙再生促進センター調べ

日本の総世帯数57百万世帯（2025年予測・約2人/世帯）の内、核家族世帯が約55%、単身世帯他が約45%程度だが、今後単身世帯比率は高齢者を中心に上昇傾向が続く。都市部では外国人世帯数も増加する。今後の雑がみ分別・回収啓発を考えた場合、現在習慣づけができていない成人の

### 【注】

- 1) グラフィック用紙  
新聞用紙や書籍・雑誌、チラシ、カタログ、パンフレット、コピー用紙等、多様な印刷物や情報媒体に使用される紙等
- 2) パッケージング用紙  
段ボール箱に使われる段ボール原紙や、菓子、冷凍食品、飲料、医薬品・化粧品や家電・雑貨の箱に利用される紙器用板紙等